

チャプター1

涙の宝石、笑いの夢

— 冒頭の語り —

「ねえ……気まぐれの海には、こんな伝説があるの。ずっと昔、深い海の底に、ある宝石がふっと現れたんだって。その宝石はあまりにも美しく、たった一度見ただけでも心を奪われてしまうらしいの。だけど、いざ手に入れようとすると、その宝石はまるで足でも生えているみたいに逃げてしまうんだって。そして、まるで欲しがっていなかった者だけが、その宝石を手にするのができたらしいの。誰もが欲しがらるのに、誰ひとり手にできなかった宝石……。決して手にしようとしないうものもとにだけ訪れる宝。それが——『涙の宝石』という伝説よ。」

エピソード1：涙の宝石

— 海岸 —

ベリア

「前にアイラお姉ちゃんから聞いたんだけど、想像しただけで胸がときどきしない？ 誰にも手に入れない伝説の宝石だなんて！ いつか絶対、見つけてみたいな！」

バター

「名前が悲しそう。宝石が涙を流すの？」

ベリア

「違うよ！ これから流す涙を全部持っていってくれるから、『涙の宝石』って呼ばれてるんだって。」

コミー

「その宝石って、どんな見た目にゃ？」

ベリア

「大きな真珠だよ！ あたしも絵で見たことあるけど、すごくきれいだった！」

コミー

「ふーん……じゃあ、今まで誰もその宝石を手にしたことはないのかにゃ？」

ベリア

「実は、ほんの少しの間だけ持っていたって話はあるの。でも……みんな最後には失くしちゃったんだって。今どこにあるのかは、誰も知らないみたい。」

バター

「バターも見たい！ 涙の宝石！」

コミー

「バター、こういうのって大抵、元からある物に尾ひれがついただけだにゃ。物の希少さを利用して、資本価値を釣り上げる典型的な手口ってやつにゃ。」

バター

「しほん……？ 勝ち……？」

ベリア

「コミーの言うこと、難しすぎるよ……。」

バター

「ん？ あれ？」

コミー

「どうしたの急に？ 缶詰でも見つけたのかにゃ？」

バター

「これ、バターが見つけた。」

ベリア

「わあっ！ 真珠だ！」

コミー

「これが、その涙の宝石かにゃ？」

ベリア

「ううん……それはこれよりずっと大きいって。でも、お姉ちゃんが真珠は珍しいものだって言ってたよ！」

コミー

「そうなんだにゃ？ じゃあバター、すごい物を拾っちゃったのかもにゃ。」

バター

「えいっ。」

(ひゅっ／ぽいと投げる)

ベリア

「うわっ！？ 捨てちゃうの！？」

コミー

「バター！ なんでにゃ！？」

バター

「こんなにきれいな、海が作るの大変だったはずだもん。だから海に返してあげた！」

コミー

「さっき、涙の宝石が見たいって言ってなかったかにゃ？」

バター

「うん……宝石も見たいけど……。バターは、教主様のほうがもっと見たい。」

コミー

「そうだにゃ。いろいろあって、コミーもしばらく会えてない気がするにゃ。」

バター

「早く教主様と遊びたい。一生懸命おつかいしたって、褒めてもらいたい！」

コミー

「今ごろ、どこで何してるんだらうにゃ……。」

ベリア

「教主様はすごいお方だもん！ きっと今ごろ、すてきな冒険をしてるはずだよ！」

— 海上 —

教主（心の声）

「うう……ここ、どこだ……？ たしかパンジュの様子を見に来て……天気がよかったから、ゴムボートの上でちょっと横になってたんだよな。……そうだ。うっかり寝ちゃって、目が覚めたら……そのあと嵐が来たんだ。そこまでは覚えている。……まさか、私……遭難したのか？」

アラグニア

「なんと！ 余の願いが、ついに海へ届いたのだな！ まさか本当に『本物』を寄越してくれるとは！」

教主

「えっ……？」

アラグニア

「ようこそ余の王国へ。手足の長い異邦人よ。」

教主

「君は誰……って、ちょっと待って。王国？ ここが君の王国だって……？」

アラグニア

「ふふ、そうである。紹介してやろう。ここは、余——最強の真珠の女王『アラグニア』が治める最強の王国……余の真珠王国なのだ！」

教主

「王国っていうには、ちょっと小さすぎない？ 一周するのに3分もかからなさそうだけど。」

アラグニア

「無礼者！ よくも余の王国を大きさで測ろうとしたな！ そもそも広さなど重要ではない！ 大事なのは中身なのだ！」

教主

「真珠王国って、どういうこと？」

アラグニア

「余が持っている、この真珠が見えぬのか？」

教主

「え……？ あの大きいのが真珠なの？」

アラグニア

「ふふ、そのとおり。」

アラグニア（心の声）

「余が初めて海の底で目を覚ましたとき、最初に目にしたものだ。正直、最初はただの石ころだと思っておったがな。」

アラグニア

「この玲瓏として神秘的な輝き、大きく優雅な姿。間違いなく、海が生み出した至高の宝であろう！ この真珠に選ばれた余こそ、海に認められし最強の真珠の女王。ならば国の名が真珠王国になるのも、当然のことよ。」

教主

「……『最強』って何？」

アラグニア

「決まっておろう。この王国には余しかおらぬ。余より強い者がいないのだから、当然、余が最強なのだ。」

教主

「……。」

アラグニア

「では、挨拶はこのくらいにして。これからよろしく頼むぞ。余と共に、この王国を立派に育てていくのだ！」

教主

「は？ なんてそういう話になるんだよ！」

アラグニア

「なぜとは？ おぬしはもう、真珠王国の民ではないか。」

教主

「なんで私が君の民なんだよ！」

アラグニア

「たった今、余がそう決めたからだ！ この真珠王国では、女王の言葉がそのまま法となる！ この慈悲深き真珠の女王は、おぬしを不法滞在者として追放する代わりに、王国の民として迎え入れることにしたのだ。ゆえに、民となったからには、女王の命に従うのが当然であろう！」

アラグニア（心の声）

「ついに余にも、治める民ができたのだな！」

教主（心の声）

「このままだと、本当にここでこき使われる……！？ 早く逃げないと……。」

教主

「だめだ、見渡す限り海ばかりで逃げ場がない！」

アラグニア

「余は長いこと、ずっとひとりで寂しかったのだ。だが、これでおぬしが来た。余は元気が出てきたぞ！ 余と一緒に、真珠王国をもっともっと最強にするのだ！ あはははっ！」

エピソード2：真珠の女王と人間の教主

アラグニア

「おぬし、手足の長い我が民よ。」

アラグニア

「おぬしの種族は、やはり人間なのだろう？」

教主

「えっ？ 私が人間だって分かるの？ なんで？ アイラも海賊たちも、私が人間だなんて知らなかったのに？」

アラグニア

「この世には世界樹という神がおり、その世界樹に仕える教団の教主が人間だと知っておるのだ。」

教主

「君……なんで世界樹や教団のことまで知ってるんだ？」

アラグニア

「ふふ、最強の真珠の女王が知らぬことなど、この世にはないのだ。冗談ではないぞ！ 民たる者が、なぜそう疑い深いのだ！」

アラグニア

「余とて、ちゃんと学んで知ったのだ！ 世界樹が妖精たちを作ったことも知っておるのだぞ！」

教主

「じゃあ世界樹がどんな姿をしてるかも知ってる？」

アラグニア

「……なんかこう、でっかい木？」

教主

「そんなの、いったいどこで知ったんだよ？ ここって君ひとりだったんじゃないの？」

アラグニア

「時おり、海の道を通して貢ぎ物が流れ着くのだ。みな、そこから学んだ。」

教主

「貢ぎ物？ あのガラクタのこと？」

アラグニア

「ガラクタとは何だ！ どれもこの真珠王国に捧げられた貢ぎ物だと言っておるだろう！」

アラグニア（心の声）

「ずいぶん前から、この王国へ流れ着くようになったのだ。」

アラグニア（心の声）

「どこの王国かは知らぬが、早くもこの真珠王国の底力を見抜き、頭を垂れておるのだろう。ふふん。」

アラグニア

「大半は何だか分からぬ物ばかりだが、まあ仕方あるまい。その国の特産品とやらが、そういう物なのだろう。」

教主

「つまり、あのガラ……貢ぎ物から知識を得たってこと？」

アラグニア

「そうだ。本から学んだのだ。本は余が最も気に入っている貢ぎ物だからな。」

教主

「……ちょっと見てもいい？」

アラグニア

「よいぞ。」

(ごそごそ)

教主（ナレーション）

水に濡れて傷んでいて、ほとんど判別できない物ばかりだったけど……一目見れば、エルフたちの本や玩具の類だということは分かった。

教主（心の声）

「これって海洋ごみ……みたいなものかな。アラグニアは、エルフたちが捨てたものを貢ぎ物だと勘違いしてるみたいだ。……物は霧の影響を受けないから、こんな沖合まで流れてこられたのかな。……でも、ごみだなんて言わないでおこう。傷つくかもしれないし。」

教主

「ねえ、君、その貢ぎ物が来た場所へ行ってみようと思ったことはないの？」

アラグニア

「エーリアスのことを言っておるのか？」

教主

「えっ、エーリアスまで知ってるんだ。そう、そこ。行ってみようって思わなかったの？」

アラグニア

「ふん！この最強の女王が、わざわざ朝貢国に赴く理由などあるものか。興味はない。」

教主

「え……？朝貢国？」

アラグニア

「余の王国に貢ぎ物を捧げてくる国ではないか。どうせ真珠王国より小さく、弱い国なのだろう。」

アラグニア

「余は、弱き国へ突然押しかけて困らせるような悪い女王ではないのだ。」

教主（心の声）

「貢ぎ物を捧げてるって思ってるから、エーリアスを小さな王国だと勘違いしてるんだな……。」

アラグニア

「そもそも、自分の王国を放って他所へ行くような無責任な女王など、この世のどこにいるというのだ？」

教主

「そ、それは……ひとり思い当たる相手はいるけど……。」

アラグニア

「……………？」

教主

「何でもないよ……。」

アラグニア

「こほん、とにかく！余はおぬしを通じて、真珠王国をもっともっと偉大にしたいのだ。」

アラグニア（心の声）

「今まで朝貢国にはいる人間が、ここにはおらぬせいで少々格がつかぬところだったが……これで余にもおぬしができた！」

アラグニア（心の声）

「もともと特別だった余の真珠王国が、これでさらに特別になったというわけだ！」

アラグニア

「おぬしよ！今日からおぬしを真珠教団の教主に任命する！」

教主

「真珠教団って何だよ……そんなの本当にあるの？」

アラグニア

「今、作ったのだ。」

教主

「いやいや、急ごしらえすぎるでしょ。世界樹教団には長い歴史もあるし……少なくとも世界樹って
いう実在の神がいるんだぞ。」

アラグニア

「実在するなら、真珠教団にもあるではないか。」

教主

「え、えっ？」

アラグニア

「ほれ、余が持っておるこのことだ。」

アラグニア

「おぬしはこれから、この真珠に仕える教主になるのだ！」

教主

「誰が決めたんだよ、そんなの!？」

アラグニア

「人間の教主とは、世界樹という神が遣わした代理人なのだろう？妖精の女王は、世界樹に選ばれた
女王であるしな。」

アラグニア

「余は海に選ばれ、こうして海が遣わした人間の教主まで得た。」

アラグニア

「これが何を意味するか、分かるか？」

教主

「私はただ遭難しただけ——」

アラグニア

「つまり、余の真珠王国が、海そのもののように特別で高貴な王国だということなのだ！」

アラグニア

「さあ、教主よ！この真珠を受け取るがよい。」

教主

「なんでこれを私にくれるんだよ？君の宝物なんだろう？」

アラグニア

「おぬしはもう真珠教団の教主なのだろう？ならばこの真珠も、おぬしが管理するのが道理というものだ。」

教主

「それで私が持ち逃げしたらどうするつもり……って、逃げられないのか。」

アラグニア

「おぬし、この真珠が欲しくはないのか？正直、もっと欲しがるものかと思っておったが。」

教主

「確かにすごい宝石だとは思うけど、欲しいかって言われると……うーん、よく分からないな。改めて見ても、別に自分の物にしたいとは思わない。たとえ欲しくなったとしても、それはアラグニアの宝物なんだし。私が取ろうとしちゃ駄目だろ。いいよ。食べられる物でもないんだし。」

アラグニア

「真珠は食べられるものだが？」

教主

「……え？」

アラグニア

「まさかおぬし、真珠が食べられぬのか？」

教主

「真珠ってどうやって食べるんだよ？」

教主（ナレーション）

アラグニアは、少し待っておれと言い残して海へ入っていった。かなり時間が過ぎたあと、アラグニアが再び島へ戻ってきた。

アラグニア

「これが真珠なのだ。これを食べぬというのか？」

(ごり、ごり——)

アラグニア

「味は微妙だが、なかなか食えるぞ。」

教主

「いや、食べられないって！そもそもそれ、食べ物じゃないだろ！」

教主（心の声）

「何なんだ、こいつ……。よく見たら見た目も話し方も、まるで竜族みたいだな……。」

アラグニア

「そうか。人間は真珠を食えぬのだな。」

教主

「ちょっと待って。じゃあ私、何を食べればいいんだ？まさかここって、食べ物が何もないの？」

アラグニア

「うーむ……余は真珠しか食わぬので、よく分からぬな。」

教主

「……真珠って、そんな簡単に手に入るものじゃないだろ？」

アラグニア（心の声）

「たしかにありふれてはおらぬ。だが余は、真珠がどこにあるか何となく分かるから、探すのは難しくないのだ。」

アラグニア（心の声）

「すべては余が、海に選ばれし真珠の女王だからであろうな。」

教主

「そ、その……ほかにはないの？魚とか……。」

アラグニア

「魚？うっ……人間はあの気味の悪いものを食うのか？」

教主

「え？まさか、あるの？」

アラグニア

「……珊瑚の森に魚は実っておるが。」

教主

「……ああ、ここもエーリアスと似たようなところではあるんだな。ちょっと取ってきてくれない？」

アラグニア

「女王に使い走りをさせる民がどこにいる！当然、おぬしが取りに行くのだ！」

教主

「私、泳げないんだよ。そもそも人間は深い海まで潜れないって。」

アラグニア

「ううっ……！人間とは、何でもできる万能の存在ではなかったのか！？」

教主

「私もそうだったら本当に良かったんだけど、残念ながら違うよ。」

アラグニア

「……待っておれ。」

教主（ナレーション）

しばらくして、アラグニアが魚を持って戻ってきた。

教主

「うーん……予想はしてたけど、やっぱり生魚か。仕方がないな。刺身だと思って食べればいいのか……？」

アラグニア

「少し待て。魚はそのまま食っても旨くないと、本に書いてあった。」

教主

「え？」

(しゃっしゃっしゃっ——ぼっ！)

教主

「な、何！？ どうやって火をつけたんだ？」

アラグニア（心の声）

「貢ぎ物として流れ着いた木切れは、もうすっかり乾いておる。少し擦ってやれば、すぐ火がつくのだ。難しいことではない。」

アラグニア（心の声）

「正確には、サバイバル知識……とかいう本にそう書いてあったのだが。」

教主

「……今、薪に本をくべたように見えたけど、大丈夫なの？」

アラグニア

「構わぬ。余はすでに何度も読んで、すべて覚えておるからな。」

アラグニア（心の声）

「かなり気に入っておる物ではあるが……女王として、教主を飢えさせるわけにはいかぬ。」

アラグニア

「さあ、食うがよい。なかなかいけるはずだ。」

教主

「……なかなかどころか、すごく美味しいんだけど？ ものすごく上手に焼けてるし。」

アラグニア

「ふふん、この最強の女王が作った食事だ。まずいはずがないであろう。」

教主

「本当にすごいな。ありがとう、アラグニア。」

アラグニア

「よい。民をいたわるのは、女王の務めだからな。」

教主

「君は食べなくていいの？」

アラグニア

「余は、おぬしが食べるのを見ているだけで腹が満たされる。」

教主（ナレーション）

焚き火の向こうで楽しそうにしているアラグニアを見ていたら、ふと、そんな気がした。アラグニアも本当は、ただ友達が欲しかっただけなんじゃないかって。

アラグニア

「たくさん食って、今日はもうゆっくり休むがよい。明日こそ本当に、王国の運営をやらせるのだからな。」

教主

「何だか分からないけど、まあやってみるよ。」

教主（心の声）

「どうせ私がいなくなったことは、パンジュのほうでも気づいてるはずだ。じきに助けに来るだろう。それまでの間くらいは、ここでアラグニアに付き合っただけよ。」

エピソード3：真珠の女王と戦乱の兆し

— 珊瑚礁の浜辺 —

教主（ナレーション）

翌日。

教主

「目が覚めたら、見慣れたパンジュに戻っていた——なんて展開には、やっぱりならないか。内心、夢であってほしいと思ってたんだけど……ん？」

アラグニア

「目を覚ましたか。謁見の間へ参るがよい、教主よ。」

教主

「は？ 謁見の間？」

— 城の中央 —

教主（ナレーション）

城の中央に、ガラクタで作られた何かがある。

教主

「……これが謁見の間なの？」

アラグニア

「なかなかそれらしいであろう？ 余は手先が器用なのだ！」

教主

「う、うん。そうだね。なんかエルフィンの謁見の間に雰囲気似てる気がするけど……エルフたち、一体どこまで何を書き残してるんだよ？」

アラグニア

「今日は教主であるおぬしに、本格的に任務を任せようと思うのだ。」

教主

「はあ……で、私は何をすればいいの？」

アラグニア

「簡単なことよ。おぬしには、この真珠教団の使徒を集めてもらう！」

アラグニア（心の声）

「使徒が増えれば、王国の民も自然と増えるであろう？」

教主

「使徒を集めろって……？」

アラグニア

「そうなのだ。」

教主

「この広い海のと真ん中で、どうやって使徒なんて集めるんだよ？」

アラグニア

「それはおぬしの裁量であろう。もともと女王が方針を定めれば、やり方は民が考えるものなのだ。」

教主

「どうしろっていうんだよ……砂で使徒の模型でも作れって？私が使徒集めをするとして、君は何するの？」

アラグニア

「ふふ……余は、この真珠王国の国運を左右する大事業を成しておるのだ。」

教主

「……………？」

アラグニア

「分からぬという顔だな。領土拡張よ、領土拡張。」

教主

「領土って……土地のこと？ そんなの増やせるの？」

アラグニア

「当然であろう。そもそもこの島だって、余が自ら作ったのだぞ。」

教主

「え……？」

アラグニア

「今となっては懐かしいものだ。余が目覚ましてから長い年月をかけ、一粒一粒、丹精込めて作った領土なのだ。」

教主

「この島を……君が作ったって？」

アラグニア

「そのとおり！ どうだ、これでこの最強真珠の女王の威厳が分かったであろう？」

教主

「うーん……アラグニア。」

アラグニア

「おほほ！ どうした？ この最強真珠の女王を称えたくなったのか？」

教主

「いくらなんでも、嘘に付き合うのは無理だよ。」

アラグニア

「なにに！？ 教主よ！ おぬしはどうしてそこまで女王の言葉を信じられぬのだ！！」

教主

「火山島とかならともかく、こんな砂の島を海のご真ん中に作ったなんて、やっぱり信じにくいって
いうか……。アイラみたいな例はあるけど……アラグニアがそういうタイプには見えないんだよ
な。」

アラグニア

「ふう……まったく。余の教主は疑い深すぎる！」

教主

「うーん……ちょっと何でも疑いすぎたかな？ でも、話が無茶すぎるんだって……」

アラグニア

「よかろう！ 信じさせるのも女王の器！ 余が自ら見せてやる！」

(ざぶんっ！)

教主 (ナレーション)

しばらくして、アラグニアが海から戻ってきた。

教主

「あ……手に持ってるの、それ何？」

アラグニア

「珊瑚の森から取ってきた珊瑚なのだ。これで土地を作ったのだぞ。」

教主

「珊瑚で土地を作ったって？」

アラグニア

「そうだ。こうして一口、ぽきっと噛み砕いて……」

(ぱりぱり——ごりごり——)

(ぺっ)

(べちゃっ)

教主

「……………」

アラグニア

「こうするのだ。分かったか、教主よ？」

教主

「き、君……今、何したの……？」

アラグニア

「砂を作って、地面に足しただけだが？」

教主

「じゃ、じゃあ……この島の砂って、全部……？」

アラグニア

「余が自ら噛み砕き、細かく砕いて作ったのだ。これで余の言葉、信じる気になったであろう？」

教主

「……………」

教主 (ナレーション)

しばらく、自分の立っている足元を見た。白い砂浜の砂に、裸足が半分ほど埋もれている。その瞬間、全身がずっと冷え込むような感覚に襲われ、ぞわりと鳥肌が立った。

教主

「そ、その……ものすごく小さい島を、君が広げたって話だよな？ 島自体はもともとあって、私はただ海を——」

アラグニア

「違うと言っておる！ 余が自ら島を作る前、ここはただの海だったのだ。何もなかったのだぞ！」

教主

「……………わ、分かった。使徒集め、頑張ってみるよ。」

アラグニア

「おお！ ついにやる気になったのか？ よい心がけだ、我が教主よ！」

教主

「あのガラクタ……じゃなくて、貢ぎ物、ちょっと使ってもいいよね？」

アラグニア

「もちろんだ。好きに使うがよい。」

(だだっ！)

アラグニア

「そう慌てる必要はないぞ。ゆっくりやるがよい！」

アラグニア (心の声)

「急にあんなにやる気を出すとは。やはり実際に見せるほうがよいのか……ふむ。」

教主 (心の声)

「逃げなきゃ逃げなきゃ逃げなきゃ逃げなきゃ逃げなきゃ……！」

アラグニア

「では余は、土地を増やす材料を取ってこよう。近くによい珊瑚の森があるのでな。」

教主

「え、あ、う、うん！ いってらっしゃい！ ゆっくり行ってきていいから！」

アラグニア

「余の真珠はここに置いていくぞ。大事に管理せねばならぬからな？」

教主

「お、おう！ ちゃんと磨いておくよ！」

アラグニア

「あははっ！ おぬしが元気いっぱいだと、余まで楽しくなるぞ！ では、行ってくるのだ〜！」

(ざぶんっ！)

教主

「いかだ……を作るには材料が全然足りないな……。で、でも旗くらいなら作れるかもしれない！これをこうして、合わせて結べば……」

(すっ——すいっ——ぎっ)

(ばさっ)

教主

「で、できた！遠くからでも見えるかな？頼む、見えてくれ……！エルフィンー！ネルー！ジョアンー！エレナー！アメリカー！ティグー！シュポー！誰でもいいから、お願いだ、私を助けてくれー！」

— 海賊船の甲板 —

スパレット

「ぎゃああっ！！あの船、いったいどこへ行っちゃったんだ！？嵐で見失ったのは仕方ないとしても……何日も海を探し回ってるのに見つからないなんて！うう……諦めるもんか！あの船と、金銀財宝がぎっしり詰まった扉は、このスパレット様のものなんだから！」

勇ましい海賊

「船長！俺たちはいつになったら船を手に入れられるんですか？」

元気な海賊

「この前からずっと、やられるか見てるだけじゃないですか！」

スパレット

「ああもうっ！！もう弱音を吐くのか！！大業ってのは、一日で成るもんじゃないんだよ！お前たち、それでもオウム海賊団の勇敢な海賊と言えるのかい！」

元気な海賊

「私は『元気な海賊』ですけど。」

スパレット

「そんな細かいこと気にするんじゃないよ！勇敢で元気なオウム海賊団なら、まずはあの船を探してきな！どうしよう……船員たちの不満が溜まり始めてる。早く何とかしないと、あたしの力量を疑うやつが出てくる……！船上反乱だ……！船長として、絶対に味わいたくない事態が起きるかもしれない！」

勇ましい海賊

「船長！あちらに何か見えます！」

スパレット

「なに！？ 望遠鏡を寄こしな！ んん？ ヨーホー……あれは……？」

エピソード4：真珠の女王と海賊の襲来

スパレット

「オウム海賊団、集まれ！ 重大発表だ！」

スパレット

「お前たち、あそこにある島が見えるか？」

活発な海賊

「島ですか？ 何も見えませんが？」

勇猛な海賊

「あそこに爪の先みたいな小島があるぞ！ 島って呼ぶのも気まずいくらいだけど！」

スパレット

「大事なものは島じゃない！ 望遠鏡でよく見な！ あそこに誰がいるだろ！」

活発な海賊

「あっあっ！ あの、ひよろ長いヤツです！」

スパレット

「そうだ！ あたしの聞いた話が正しけりゃ、あいつがまさにあの船の船長ってわけだ！」

スパレット

「なんであんなところにいるのかは分からないけど……」

スパレット

「あいつさえ捕まえりゃ、あの船をまた見つけれられるはずだ！」

勇猛な海賊

「でも、あいつもあそこで漂流してるように見えますけど？」

スパレット

「バカか！？ 船長なんだから、船の場所くらい分かるだろうが！ 捕まえてから、どこにあるか聞けばいいんだよ！」

スパレット

「あたしたちはあの船長野郎を捕まえて船を見つけたあと、あいつを引き渡す代わりに船をいただくんだ！」

スパレット

「誘拐だ！ 略奪だ！ お前ら、準備しな！」

海賊たち

「はい、船長！」

スパレット

「やあああっ！！」

海賊たち

「やあああー！！」

教主

「な、何だよ。あれ、海賊船じゃないか？」

教主

「まさか、旗を見て来たのか？」

教主

「誰でも来てくれとは思ったけど、よりによって海賊だなんて……。」

アラグニア

「どうしたのだ、教主よ？ 海が騒がしいな。」

教主

「アラグニア？ その……どうやら海賊が来たみたいなんだ。」

アラグニア

「海賊？ 海で略奪ばかりしておる、あのろくでもない者どものことか？」

教主

「え？」

アラグニア

「会ったことはないが、本で読んだのだ。」

スパレット

「おーい！ そこにいるひよろ長いヤツ、聞こえてるかー！」

スパレット

「ここは今からオウム海賊団が接收する！ ひどい目に遭いたくなきゃ、大人しく捕まれ！」

アラグニア

「もしかしてあれは、おぬしが使徒にしようと呼び寄せたのか？」

アラグニア

「我が教主は、なんというか……ずいぶん趣味が荒っぽいのだな。」

教主

「そんなわけないだろ！ あいつら、私を捕まえに来たんだよ！」

アラグニア

「な、なんだと？」

教主

「たぶん、私が作った旗を見て来たんだと思う。」

教主

「ごめん、こんなことになるなんて……。」

アラグニア

「ふむ……。」

アラグニア

「謝る必要はないのだ。」

アラグニア

「民の失敗を包み込むのも、また女王の務めゆえな。」

スパレット

「おーい！！ 何してる！ あたしの声が聞こえるなら、さっさと旗を振れってんだ！」

アラグニア

「……だが、あの無礼者どもには、少し礼儀を教えてやる必要があるそうだな。」

アラグニア

「よくも我が王国に無断で踏み込んだばかりか、我が教主を奪おうなどと……！」

アラグニア

「おぬしたちは全員、腹ぺこ送りなのだ！」

勇猛な海賊

「うわあっ！ せ、船長！ いきなりすごい波が——！」

活発な海賊

「船がひっくり返りそうです！」

スパレット

「くおおっ！ あたしは気まぐれの海だって庭みたいに渡り歩く、オウム海賊団の船長だぞ！」

スパレット

「この程度の波、いくらでも耐えてみせるわあっ！」

アラグニア

「ふむ……沈めるつもりで波を起こしたのだが、思ったよりよく耐えるではないか。」

教主

「負けてるの？」

アラグニア

「勝っておる。」

アラグニア

「ふん、よい。耐えるというなら、もっと大きな波で飲み込んでくれよう。」

アラグニア

「この最強真珠王国の最強の女王、アラグニアの力——とくと見よ——」

スパレット

「お前ら！ 砲撃だ、砲撃！ 撃てーっ！」

アラグニア

「え、えっ？ それは何——」

アラグニア

「くええっ！！」

教主

「ア、アラグニア！ 大丈夫か！？」

アラグニア

「あ……痛い……なんだこれは……すごく痛いのだ……。」

教主

「うわああっ！ 島が狭くて隠れる場所がない！」

アラグニア

「おぬしよ！ 余の真珠はどこにある！？」

教主

「私が持ってる！ ここだよ！ 返す！」

アラグニア

「さすがは真珠教団の教主なのだー！ 王国の宝を、しかと守ってくれておったな！」

アラグニア

「くううっ！ 今からでもあの侵略者どもに思い知らせ——」

スパレット

「そのまま撃ち続けろ！ あんなちっぽけな島ごと沈めちまえ！」

アラグニア

「きゃあああっ！ 余の大切な真珠王国が、めちゃくちゃになっておるではないか！」

スパレット

「くははっ！ 砂しかない島だからか、撃つたびにずぶずぶ抉れるじゃないか！」

スパレット

「今日こそ、あの島を地図から完全に消し去ってやるんだ！」

活発な海賊

「船長！ もともと地図にない島です！」

スパレット

「ああもうっ！ そういう細かいこと気にするなっの！」

スパレット

「やあああっ！！ 撃て！ 発砲！」

アラグニア

「や、やめるのだ！ このままでは島が……王国が消えてしまう……！」

アラグニア

「おぬしよ！ このままでは砂が全部、流されてしまうのだ！」

アラグニア

「余の王国には木も岩もない……だから砂をつなぎ止めておけぬのだ！」

教主

「アラグニア、危ない！ そこにいないで、早く避けて！」

アラグニア

「だ、だめだ……早く砂を止めなければ……！」

アラグニア

「余の、余の島が……長い時間をかけて、やっとの思いで作った王国が……。」

アラグニア

「これは……これは夢なのだ……。」

アラグニア

「ぐう……。」

教主

「アラグニア、しっかりしろ！」

教主（心の声）

「気絶してる……？ 王国が壊されていくのが、そんなにショックだったのか……？」

活発な海賊

「船長！ ひよろ長いヤツの隣にいた、ちっこいヤツが気絶したみたいです！」

スパレット

「よし、上陸だ！」

海賊たち

「うおおおー！」

スパレット

「やあああっ！！」

海賊たち

「やあああー！！」

エピソード5：真珠の女王と冷酷な海賊の世界

アラグニア

「ううん……」

アラグニア

「……あ、あれ？」

アラグニア

「ここは、どこなのだ……？」

スパレット

「目を覚ましたか、ちびっこ。」

スパレット

「ここはオウム海賊団の海賊船だ。」

スパレット

「お前はあたしたち海賊団の捕虜ってわけ！」

アラグニア

「捕虜……？ そ、そういえばあの時、気を失って……」

アラグニア

「……………」

アラグニア

「我が王国……！ 余の王国はどうなったのだ！」

スパレット

「王国？ あのちっこい島なら消えたけど？」

アラグニア

「な、なんだと……？」

スパレット

「砂しかなかったからかね。砲弾をちょっと撃ち込んだら、波にさらわれて消えちまったよ。」

アラグニア

「余の王国が……き、消えた……？」

アラグニア

「……………」

アラグニア

「うう……………」

アラグニア

「本当に…………本当に長いあいだ…………一生懸命作ったのに…………ひっ…………ううっ…………」

手下の海賊

「船長！ なんか俺たち、急にクズになった気がするんですが！」

スパレット

「うるさい！ あたしたちは海賊だよ！ もともとこういう連中だろうが！」

スパレット

「文句があるなら『ポルレ』って叫べばよかったんだよ！」

アラグニア

「きょ、教主…………！ 我が教主はどこなのだ！」

スパレット

「あのひよろ長いヤツのことなら、あたしたちの後ろだよ。」

教主

「んんーっ！ んんーっ！」

アラグニア

「教主！」

アラグニア

「おぬし、無事か！？ どこか怪我はしておらぬか！？」

教主

「んーっ！」

アラグニア

「この残酷な者どもめ！ 取り柄といえばひよろ長い手足くらいしかない教主を、こんなぐるぐる巻きにするとはい！」

スパレット

「あー、あのでかいのがうろちょろすると面倒なんだよ。」

スパレット

「そもそも、あたしたちはこいつに用があるのであって、お前には興味ないんだって。」

アラグニア

「な、なんだと？」

スパレット

「最初はこいつの部下っぽく見えたから一緒に捕まえてきたけど、どうやらそうでもなさそうだしね。」

スパレット

「このスパレット様が慈悲を見せてやるよ。ひとりで出ていくってんなら、週末養魚場送りにはしないで置いてやる。」

勇猛な海賊

「うおお！ひとりで出ていけー！」

手下の海賊

「みっともなく去れー！」

アラグニア

「ううっ……！教主に手を出すな！」

アラグニア

「女王は決して、自分の民を見捨てたりはせぬのだ！」

手下の海賊

「どうします、船長？あいつ、けっこう強そうですけど。」

スパレット

「まあね。縮こまってるだけでも姿勢を崩さなかったし。だから縛ることもできなかったわけだ。」

勇猛な海賊

「それなら、自分に妙案があります！」

勇猛な海賊

「逃げるまで、ひよろ長いのをボコるぞって脅すんです！」

アラグニア

「な、なんだと！？」

教主

「んんーっ！」

スパレット

「バカか？ それなら、ちびっこを殴れば済む話だろ。」

手下の海賊

「は、反撃されたらどうするんですか！ 俺、まだ週末養魚場送りは嫌ですよ！」

スパレット

「反撃したら、その時ひよろ長いのを殴るって言えばいいだろ！」

スパレット

「そしたら、あいつは大人しく殴られ続けるか、逃げるかするしかないじゃん！」

勇猛な海賊

「おお～！ さすが船長、天才です！」

手下の海賊

「崇拜します……」

スパレット

「聞いたろ？ 大人しくしてな、このチビ。ひよろ長いのの顔がホットクみたいになるのを見たくなかったらね。」

教主

「んんーっ！」

アラグニア（心の声）

「くうっ……卑怯な海賊どもめ……！」

アラグニア

「なんという残酷な真似をするのだ……！」

アラグニア

「心配するな、余が助ける！ 王国を失ったのに、教主まで失うわけにはいかぬのだ！」

スパレット

「くくっ。こういう時のために、とっておきの手を用意してあってね。」

スパレット

「あの船に乗ってた連中から、苦勞して聞き出した軍事機密さ。」

スパレット

「三人で120度に囲んで、ぶん殴れば何もできなくなるんだってさ！」

手下の海賊

「視界と逃げ道を封じて、無慈悲にデコピンを浴びせる……。実に恐ろしい方法……！」

勇猛な海賊

「オウム海賊団の情報力を思い知れ！」

勇猛な海賊

「本当に苦労して手に入れた情報なんだからな！」

アラグニア

「くえっ！ きゃっ！ いたっ！」

手下の海賊

「なんだ、ほんとに何もできないじゃん？」

手下の海賊

「船長！ これ、ほっぺまで引っ張っていいんじゃないですか？」

スパレット

「だめ。それはあまりにも悪辣なやり方だ。」

スパレット

「ほっぺ引っ張り、海賊の中でも最悪の連中にしかやっちゃいけないんだよ！」

スパレット

「デコピンだけにしときな！」

勇猛な海賊

「はい、船長！」

手下の海賊

「慈悲深い船長に感謝しろよ、ちびっこ！」

アラグニア

「い、痛い！ や、やめるのだ！ いたあっ！」

(ころころころ……)

スパレット

「ん？ なんだこれ？」

アラグニア

「あっ……！ 余の真珠！」

スパレット

「はあ？ このでっかいのが真珠だって？」

スパレット

「うーん……？」

スパレット

「待てよ、まさか……」

アラグニア

「返すのだ！ それは余が見つけた、余の宝——」

スパレット

「うひょおおおっ！！！！」

手下の海賊

「せ、船長！？」

勇猛な海賊

「どうされたんですか！」

スパレット

「これ、『涙の宝石』じゃないか！」

勇猛な海賊

「な、涙の宝石！？ 伝説のあの宝石ですか？」

手下の海賊

「それって、誰にも持てないって話じゃ……？」

スパレット

「絵で見たことあるから分かる！ 本物の涙の宝石だよ！」

スパレット

「たしか、絶対に欲しがらない者のところにだけ現れるんだっけ？」

スパレット

「まあ、あたしなら持ってるより、さっさと売っ払う性分だしね！」

スパレット

「あたしたち、もう大金持ちだ！」

スパレット

「このあとあの船まで手に入れりゃ、このスパレット様が気まぐれの海一番の海賊になるんだよ！」

海賊たち

「うおおおー！」

アラグニア

「返せと言っておる！ それは余が見つけた、余の宝なのだ！」

スパレット

「ちっ。なんでそれがお前の物なんだよ？ それは今日から、このスパレット様の物だ！」

スパレット

「悔しかったら取り返してみな！」

スパレット

「もちろん、その代わりにあたしたちはこのひよろ長いのを殴るけどね。」

アラグニア

「くうっ……！」

アラグニア（心の声）

「真珠……教主……どうすれば……」

アラグニア

「うう……」

アラグニア

「うううーっ！」

(どさっ)

アラグニア

「女王は……民を見捨てない……」

スパレット

「そうそう、逃げる気がないなら、そのまま大人しくしてな！」

スパレット

「妙な真似はするんじゃないよ？」

スパレット

「少しでも暴れたら、ひよろ長いのは週末養魚場送りだからね！」

スパレット

「お前ら！ 今日は宴だ！ ヨーホー！」

手下の海賊

「船長！ あいつが船を壊して、ひよろ長いのと一緒に逃げたらどうするんです？」

スパレット

「あんなちっこい体から、そんな力が出るわけないだろ？」

スパレット

「海の上じゃ波を起こされて少し苦労したけど……」

スパレット

「ここは水の外だよ！ 素手で船を殴ったところで、手が痛くなるだけさ！」

スパレット

「行くよ！ 今日はあたしのおごりだ！」

海賊たち

「うおおおお！！」

エピソード6：真珠の女王と教主の誓い

教主

「んんっ、んんっ……」

アラグニア

「待つのだ……少し待て。猿ぐつわを外してやる。」

(する、する)

教主

「……アラグニア。どうしてあんなことをしたんだ？ あれ、お前の大事な宝物だったんだろ。」

アラグニア

「……民を守るのは女王の務めだからな。それに……おぬしは初めてできた、余の民だったのだ。」

アラグニア

「……………いや……違うのだな。もう王国も……真珠もないのだから……余は……私は……もう特別ではない……」

アラグニア

「もう最強の女王ではないのだ！ 私はもう特別じゃない……何でも無い存在になってしまった……」

アラグニア

「ひっ……うわあああん！ 余の王国……！ 余の宝物……ううううっ！」

アラグニア

「すまない、教主……私が、おぬしを巻き込んでしまって……」

教主

「……なんでお前が謝るんだよ。海賊たちは私を狙って来たんだ。突き詰めれば、全部私のせいだろ。」

アラグニア

「ひっく……でも……私が、おぬしに教主なんてものを任せたせいで……」

教主

「お前じゃなくても、私は結局、目立つ何かを作ってたと思う。できるだけ早く、元いた場所に戻ろうとしてたはずだから。」

教主

「アラグニア。私は世界樹教団の教主なんだ。」

アラグニア

「世界樹……教団？」

教主

「うん。お前が知ってるエーリアスは、小さな王国なんかじゃない。あの海の向こうにある大きな大陸で、そこには本当にいろんな王国があるんだ。私はその王国の一つ、妖精王国エルピエンで……世界樹教団を預かる教主をやってる。私が気まぐれの海に来たのは、探査のためだった。それで少し休んでる間に嵐に遭って流されて……お前の島に漂着したんだ。」

アラグニア

「……………」

教主

「私は、海が送ってくれた贈り物なんかじゃない。全部……全部、私のせいなんだ。ごめん、アラグニア。」

アラグニア

「……………そんなことは、どうでもよい。」

教主

「え？」

アラグニア

「誰が何と言おうと、おぬしは私が初めて出会った民なのだ。おぬしの正体が何であろうと、その事実は変わらぬ。だから私は、いつまでもおぬしを信じ、守る。そう決めたのだ。」

教主

「……アラグニア。やっぱり、お前は最強の女王だよ。」

アラグニア

「何……？ だが私はもう何も……」

教主

「王国や真珠が、お前を特別にするわけじゃない。お前がいるから、その二つが特別になるんだ。お前、一方的に話を押しつけながらも、ずっと私を守ってくれた。それに全部失ったって言いながら……最後まで私を信じて、守ろうとしてくれた。そんなお前が特別じゃなかったら、何なんだよ？ 私の目には、王国や真珠よりも、ずっと私を信じて守ってくれたお前のほうが、何百倍も何千倍も輝いて見えるし、特別だ。だからお前は、最強の女王様で間違いない。世界樹教団の教主であり……お前の最初の民である私が、それを保証する。」

アラグニア

「本当に特別なのは……私……」

教主

「アラグニア。まだ私を信じてくれるか？」

アラグニア

「何？ そ、それは当然であろう。おぬしは私の最初の民なのだから。」

教主

「だったら私を信じて。」

アラグニア

「う、うん？」

教主

「お前がまだ、自分の特別さを信じきれないなら……お前が特別だって信じてる私を、信じてくれ。」

アラグニア

「……………あはっ……………」

教主

「アラグニア？」

アラグニア（心の声）

「アハハッ！ 何だその気恥ずかしい台詞は！ まったく……胸がときどきする言葉なのだな。」

教主

「はあ……やっといつもの喋り方に戻ったな。やっぱり最強の女王様なら、そうじゃないと。」

アラグニア（心の声）

「ただ少し、しょげていただけなのだ。もともと女王とは気まぐれなものなのだ！ 私がおぬしの女王であるなら、私もその信頼にふさわしい品格を見せねばならぬであろう。これまで私は、特別であるためには何か手段が必要だと思っていた。目を覚ました時、最初に見たすべてがあまりにきらびやかで特別に見えたから、それらを手にしてこそ自分も特別になれるのだと信じていたのだ。『最強』という言葉に執着していたのも、あるいはそういう思い込みから来ていたのかもしれぬ。だが、おぬしの言葉を聞いて目が覚めた。特別さとは、結局、私が特別だと信じるからこそ特別なのだということに。民の忠言に耳を傾けるのも女王の徳。おぬしの言葉、胸に刻もう。我が教主よ。」

教主

「それなら良かった……って、あれ？ アラグニア？」

(ざく、ざく)

教主（ナレーション）

アラグニアが、自分の手足を縛っていた縄を噛みちぎって切ってしまった。こんな簡単に噛み切れるものだったっけ……？

アラグニア

「余の牙は、硬い珊瑚すら粉にするのだ。たかが縄ごとき、耐えられるはずがなかろう。……本当は、迷っていたのだ。」

アラグニア（心の声）

「私がこの船を襲えば……捕らえられているおぬしも、海賊に奪われた真珠も、一緒に海へ沈んでしまふ。いくら私でも、その二つを同時に救うことはできぬ。」

アラグニア

「だが、ようやく分かったのだ。これは最初から、悩むまでもないことだった。おぬしよ、息を止めるのだ。ここから脱出する。」

教主

「か、勝つんだよね？」

アラグニア

「ふふっ、勝つのだ！」

スパレット

「たらふく食っとけ、お前ら！ 明日にはあたしたちは大金持ち……ん？」

活発な海賊

「あれ……船長。なんか船が傾いてません？」

スパレット

「いきなり何が——って、な、何だあれは！？」

海賊たち

「つ、津波だあああっ！！」

スパレット

「いったい何が起きてんだよ！」

太った海賊

「津波で船が沈みました……！」

スパレット

「うわっ！ あたしの宝石が……！ どこ行くんだ！ お前はあたしのものだろ！」

太った海賊

「船長！ これ以上下がっちゃ駄目です！」

活発な海賊

「いくら船長でも、海流に呑まれたら週末養魚場行きですよ！」

スパレット

「おい！ 放せてんだろ！？」

太った海賊

「船長！ 上がってください！」

スパレット

「あたしの宝石が沈んでくっつてのに！ だめだああっ！」

教主（ナレーション）

目の前で『涙の宝石』が沈んでいっていた。それでもアラグニアは、そちらには目もくれず、私をつかんだまま水面へ上がっていった。

教主

「ぶはあっ！ 死ぬかと思った！」

アラグニア

「アハハッ！ 水に落ちたおぬしの顔は、実に滑稽だったぞ！ アハハハッ！ くたばれ海賊ども！ 余と教主は去るゆえ、そこで海水でも好きなだけ飲んでおれ！」

スパレット

「くうっ……！！ おい！ あたしの船どうしてくれる！ あたしの宝石はどうすんだよ！ 次に捕まえたら、ただじゃおかないからな！！」

アラグニア

「ふん！ ナマコだのホヤだのイソギンチャクだのでも食べておれ！ さあ、おぬしよ！ 帰るぞ、我らの王国へ！」

エピソード7：真珠の女王と涙の宝石

(ざあああ——)

アラグニア

「やはり、何も無いのだな。積み上がっていた貢ぎ物も、すべて流されてしまったし……あれほどきらきらしていた白い砂浜も見当たらぬ。あの海賊の言うとおりに、余の真珠王国は完全に消えてしまったのだな。」

教主

「うーん……でも、まだ水がくるぶしまで来るくらいだし……また作り直せるんじゃないか？」

アラグニア

「このあたりは潮の流れが速いゆえ、砂はすぐ散ってしまうのだ。以前のように、波を一つひとつ操って作ればできなくはない。だが……余は、そこまでする必要はもう感じておらぬのだ。」

教主

「……どうして？」

アラグニア

「当たり前のことを聞くのだな。余には、もうおぬしがいるではないか。王国も真珠も消えてしまったが、不思議と余はとても晴れやかな気分なのだ。思えば……ここにいた間、心から気の休まる日は一日もなかった。歯がすり減るほど珊瑚を砕いて砂を作り……その砂が流されはしないかと、毎晩気を揉んでいた。いつも『最強の真珠王国』『最強の真珠の女王』と口にしてはいたが……実のところ、それは特別になりたいという切実さであり、もがきにも近かったのだ。長い長い時間を、ただ特別でありたいという意地に囚われて、無駄にしていたようなものだ。まことに愚かだと思わぬか？特別になろうとしなくとも、余はすでに特別な存在であったというのに。」

教主

「誰だって失敗はするよ。完璧な存在なんていない。私だって、一人で何かを完璧にやり遂げたことなんて一度もない。」

アラグニア

「おぬしも、そうだったのか？」

教主

「もちろんだよ。これまでたくさん助けられてきたし……たくさんのことを学んできた。そういう縁があったから、今の私があるんだ。お前も同じだよ、アラグニア。少し遠回りしただけで、間違っていたわけじゃない。」

アラグニア

「そうなのか？ それなら、余たちは似た者同士なのだな。」

教主

「はは、そうかもな。」

アラグニア

「あははははっ！ おぬしよ、見てみよ。日の昇るさまは、なんと美しいのだろうな。あの燦然と昇る太陽も、燃え立つように揺れる波も海も……余が見つめる世界は、これほどまでに美しい世界であったのだな。」

教主

「そうだな。きれいだ。」

アラグニア

「長いこと、この美しさを忘れていたのだ。すべてを手放してみて、ようやく見えるようになったのだな。」

教主

「アラグニア。」

アラグニア

「どうしたのだ？」

教主

「あの時、海賊船を沈めた時さ。沈んでいく真珠を、お前も見てたはずなのに……どうして私のところに来たんだ？」

アラグニア

「必要なからだ。あの海賊は言っておったな。あれは手にすることのできぬ伝説の宝石だと。だが、あやつは間違っておる。あれは『手に入らぬ宝石』などではないのだ。あれは、『手放させる宝石』なのだ。真に特別なものが何かを悟れば、あのような真珠など、ただの邪魔な石ころにすぎぬと分かる。初めて目を開いた時、何もかもが新しく、特別に見えていた余に……あの真珠が、ただの石ころに見えたようにな。あれは、本当にただの石ころでしかなかった。だが、『涙の宝石』という名だけは、本物だったようだ。」

教主

「名前だけは本物だったって？」

アラグニア

「そうなのだ。余の涙を、すべて持って行ってくれたではないか。あの真珠を手放したことで、本当に特別なのは余自身なのだと知ることができた。それを教えてくれたのは、ほかでもないおぬしだ。あの日、おぬしが波に流されて余の王国へやって来た時、余は『おぬしという存在を見つけた』のだと喜んでいて。だが、そうではなかった。余がおぬしを見つけたのではない。おぬしが、余を見つけてくれたのだ。おぬしよ、我が教主よ。ありがとう。余を見つけてくれて。」

アラグニア

「む？何か近づいてきておるな。あれは何だ？」

教主

「近づいてるって、何が？」

アラグニア

「あの水平線の向こうに、小さく見えているものだ。」

教主

「え……ああっ！パンジュだ！」

アラグニア

「パン……ジュ？」

教主

「私が乗ってきた船だよ！みんなーっ！！ここだ、ここーっ！！うわああ、助かった……。こっちに流されたって分かったみたいだ。」

アラグニア

「おぬしは、これでエーリアスへ帰るのか？」

教主

「たぶん？ここにも半分は休みに来てたようなものだったし。」

アラグニア

「そうか……。」

教主

「アラグニア。私と一緒に来いよ。」

アラグニア

「余が……おぬしと？それで、よいのか？」

教主

「だめな理由なんてないだろ。世界樹教団の門は、いつだって開いてるんだから。それに、エーリアスにもけっこうきれいな海辺があるんだ。」

アラグニア

「エーリアスの海、か……。なるほど、余も気になるのだ。……………よし。余は、教主の忠言を受け、正式に世界樹教団への亡命を申請するのだ。」

教主

「うん、いい考えだ。」

アラグニア

「では、これからよろしく頼むぞ。我が教主よ。」

教主

「こちらこそよろしく、アラグニア。」

エピソード8：真珠の女王と笑いの夢

教主（ナレーション）

その後、エーリアスへ渡ったアラグニアは、正式に世界樹教団の所属となった。本人の希望どおり、エーリアスの海辺に居を構え、そこへ遊びに来る獣人たちと友達になった。

アラグニア

「……ここまでが、余がエーリアスへ来ることになった経緯なのだ。」

バター

「わああ！ 真珠の女王様！ すごくかっこいいです！」

バター

「バターも真珠王国に行ってみたいです！」

アラグニア

「あははっ！ それは難しいのだ。」

アラグニア

「余の王国は、真珠とともに海の底へ消えてしまったからな。」

アラグニア

「長く抱えていた未練とも別れを告げたゆえ、今となっては行きたくても行けぬであろう。」

バター

「ひいん……残念です……。」

デリア

「教主様！ 教主様は実際に行ったんですよね？」

教主

「うん。でも、そんなに見るものはなかったよ。砂しかないし、すごく小さかったし。」

アラグニア

「おぬしよ！ 大きさは問題ではないのだ！ 大事なの中身であろう！」

教主

「あ、分かった！ 叩かないで！」

デリア

「真珠王国……！ やっぱり教主様って、ものすごい冒険をしてきたんですね！」

バター

「コミー！ コミーも行ってみたくない？ 真珠王国！」

コミー

「ぐすっ……」

バター

「コミー？」

コミー

「ううっ……うわああん！！」

バター

「コミー！？ どうして急に泣くの！？」

コミー

「うわあん……泣いてなんか……ぐすっ……ないにゃ……目にホコリが入っただけにゃ……！」

バター

「ホコリで出る涙じゃない気がするけど……。」

コミー

「コミーは……こんなお話くらいで……感動なんて……ぐすっ……しないんだからにゃ……うえええん！！」

デリア

「……時々思うけど、コミーってすごく感受性が強いよね。」

バター

「真珠の女王様！ 真珠の女王様！」

アラグニア

「アラグニアと呼んでくれてよいのだ。」

アラグニア

「今の余は、もう王国の女王ではないからな。」

バター

「うーん……じゃあアラグニアお姉ちゃん！ お姉ちゃんはこれからも、ずっとこの浜辺に住むんですか？」

アラグニア

「おそらく、そうなるであろうな。」

バター

「わあ〜！バター、これからたくさん遊びに来ます！一緒に遊びましょう！」

アラグニア

「あははっ！そうするとよい。」

コミー

「ぐすっ……じゃあ、デリアが言った『涙の宝石』って、本当にあったんだにや？」

アラグニア

「そうなのだ、コミー。もっとも、今はもう持っておらぬがな。」

コミー

「うん……コミー、アラグニアの選択を尊重するにや……。」

コミー

「だって、それは『手放すための宝石』なんだもんにや……。」

コミー

「コミーも、そうやって手放せる生き方をしないとにや……。」

アラグニア

「そう無理をせずともよいのだ。」

アラグニア

「手放し方を学ぶのは、もう少し後になってからでも遅くはない。」

アラグニア

「今はただ、楽しく遊ぶこと、うれしく笑うことだけを覚えればよいのだ。」

デリア

「なんていうか、アラグニアお姉ちゃんって大人っぽいです！」

アラグニア

「え、う、うむ？大人っぽい？」

デリア

「はい！話し方もそうだし、なんだか教主様を見てみたいですよ。」

アラグニア

「よ、余が教主と……？」

アラグニア（心の声）

「ふふっ……まあ、余たちは似た者同士だからな。」

アラグニア

「ありがとう、デリア。そのように言ってもらえて、本当にうれしいのだ。」

バター

「アラグニアお姉ちゃん！じゃあ、王国ごっこはもうしないんですか？」

アラグニア

「いや、そうでもないのだ。ここにも余の王国を築くつもりだからな。」

教主

「それ、まだ続けるつもりだったんだ……？」

アラグニア

「もちろん、前のように執着して作るつもりはないのだ。どちらかと言えば、住みかを作るのに近いであろうな。」

教主

「なんだ、びっくりした……。」

アラグニア

「そしておぬしには、新たな王国に建てられる真珠教団の教主になってもらわねばならぬ。」

教主

「いや、なんでまたそうなるんだよ！？」

アラグニア

「決まっておろう。おぬしは余の民だからな。」

アラグニア

「心配するでない。真珠教団は、兼業兼職を認める自由で健全な採用文化を採用する予定なのだ。」

教主

「……またエルフの本、読んだだろ。」

アラグニア

「あの妙な種族は、王国の形も妙だが、学ぶべきことは多いのだ！」

アラグニア

「これは、世界樹教団の教主が認めた余、アラグニアが築く新たな王国……」

アラグニア

「であるならば、これから生まれる王国は、神の認可を得たと見なしても差し支えあるまい。」

教主

「え、うん……？ それ、そういうことになるのかな……？」

アラグニア

「新たな王国の名は、すでに決めてあるのだ。」

アラグニア

「その名も、真珠王国シーズン2……」

アラグニア

「神聖真珠王国を、新たな国号として宣言するのだ！」

(ぱちぱちぱち——)

バター

「わあああ！」

デリア

「すてきです！」

コミー

「ぐすっ……」

教主 (心の声)

「厳密に言うと、神聖でもないし……真珠でもないし……王国でもないんだけど……そのへんは黙っておくことにした。」

アラグニア

「では余は、これより王国となる新たな土地を作るのだ。」

教主

「え？ ただこの辺に作るんじゃないの？」

アラグニア

「エーリアスの本土は、どこもすでに持ち主がおるではないか。」

アラグニア

「そこへ余の王国が急に割り込んでは、おかしいことになってしまうのだ。」

アラグニア

「ゆえに余は、この海岸の近くに新たな領土を作る。」

アラグニア

「そして、余の真珠王国をエーリアスで最も偉大な王国にしてみせるのだ！」

教主

「うん……やる気があるのはいいことだね……。」

バター

「アラグニアお姉ちゃんって、土地まで作れるんですか？」

アラグニア

「もちろんである、バター。海洋干拓こそ、真珠王国の主力事業と言ってもよい！」

バター

「海洋干拓……？ それって何ですか？」

コミー

「コミー、本で読んだことあるにゃ。海を埋め立てて、土地を作る方法だにゃ。」

デリア

「わあ！ 海を埋めるんですか？ すごい！」

教主

「え？ ちょっと待って……アラグニア、それは——」

アラグニア

「ちょうどこの海にも、見事な珊瑚の森があつてな。それで今朝、一つ持ってきたのだ。」

デリア

「珊瑚で土地を作るんですか？」

アラグニア

「そうなのだ。こうして一口、ぱきっと噛みちぎって——」

教主

「あ、だめ！ それを見せたら——！」

(ぱきっ——ごりごり——)

アラグニア

「ぺっ。」

バター

「……………」

コミー

「……………」

デリア

「……………」

教主

「あーあ……」

アラグニア

「このように少しずつ、土地となる砂を作るのだ。どうだ、大したものだろう？」

バター

「バター……なんだか気分が悪くなってきました……。」

コミー

「こ、コミー、急に思い出した用事があるにや……！」

デリア

「そ、それじゃお姉ちゃんが呼んでる時間なので！」

(だだだっ——)

アラグニア

「幼き獣人たちは行ってしまったか。残念なのだ。」

教主

「たぶん、しばらくはここに来ないと思うよ……。」

アラグニア

「うむ？ 何と言ったのだ？」

教主

「何でもないよ……。」

(ざあああ——)

アラグニア

「おぬしよ。」

アラグニア

「余は、おぬしとこれからも共にいられることが、本当にうれしいのだ。」

教主

「それならよかった。」

アラグニア

「だからこそ、この喜ばしき気持ちのまま、新しい夢を見ようと思うのだ。」

教主

「新しい夢？」

アラグニア

「そうだ。」

アラグニア

「余の愚かであった昔の夢は、涙とともにあの宝石がすべて持って行ってくれた……。」

アラグニア

「だからこれからは、新しく作っていく——笑いの夢を見ようと思うのだ。」

アラグニア

「ゆえに見届けてくれ、我が教主よ。」